

「第1回台湾英語教育視察プログラム」実施報告

SIG東アジア小学校英語教育研究

1. 今回の視察について

代表：加納幹雄（元 岐阜聖徳学園大学）

本プログラムを企画した趣旨は、昨年もお示しましたが「小中高大の先生方に海外教育視察により、自分が関わっている日本の英語教育の在り方を見つめる機会を提供すること」です。自分の教室しか見ていない場合は、その教育の在り方を問い直すことは、なかなか難しいことかと思えます。本プログラムの価値については、本プログラムのどの場面を切り取っていただいても、自らの実践を振り返ることができる内容であることは、昨年と同様、本年の報告書を読んでいただければおわかりいただけることかと思っています。

今後の学校教育を考えると、新しい学びとして「探究的な学び」の在り方が問われ、各教科が統合的に参画する学びが求められています。つまり、教科英語は、どのような寄与ができるのかということかと思えます。その意味で「何のために英語教育はあるのか」がまた問われているといってもよいかと思えます。そのようなことを考えていると、本企画は、様々な問いを持っている先生にとって、他に代替できることのできないものであるかと思っています。

2. 実施概要

(1) 期日：2026年3月25日～30日

(2) 訪問学校・機関

- 25日 午前：台北市立大直高等学校
午後：国立台湾師範大学
- 26日 午前：高雄市立内惟小学校
午後：国立高雄師範大学附属中学校
午後：国立高雄師範大学英語系
- 27日 午前：国立鳳山高等学校
午後：高雄市教育指導センター
- 30日 午前：台北市立立農小学校

(3) 参加者の内訳：小学校教員3名 大学等教員7名 合計10名



<高雄市・国立鳳山高等学校 1年生の授業>

訪問校では、基本的に1授業時間の授業を視察しました。交流会などの特別な授業ではなく、通常の授業の公開をお願いしました。視察後は、1時間程度の授業の振り返りや質疑応答を行いました。録画や録音などの許諾をいただき、帰国後の研究や研修のまとめなどへの便宜がはかれるように協力を得ることもできました。なお、訪問期日の設定では、日本の年度末の行事等を考慮した結果、訪問日程に土日が入ってしまい、今後の企画における課題となりました。

SIG研究テーマ：東アジアの小学校英語教育についての研究

設立趣旨：従来、大学教員による海外教育視察は個別に行われてきたが、初等中等教育現場の教員にとっては制度的・経済的な制約が大きく、参加が困難であった。本SIGはそうした課題を乗り越え、大学と現場教員の共同による海外の授業視察と視察に関連する学びの機会を創出すると共に、小学校教員と大学等教員の授業研究分野での協働研究を活性化することを目的とする。当面は、台湾を研究対象とするが、将来的に活動の発展を期待して「東アジアの小学校英語教育研究」と称する。

※ 本SIGの活動や企画の詳細は、このパンフに寄稿しているメンバーにお尋ねください。

参加者の声（小学校外国語専科の先生方）

■ 台湾英語教育視察に初めて参加して

このプログラムで参観した小学校では、授業は英語専科教員が担当し English classroom で行っています。児童は、教科書などの道具を持ってその部屋に行き、授業を受けていました。そこには授業で使用する教具等が備え付けてあるため、教師は授業を効率的に進めていました。

授業は、欠席者確認等の日常的な会話から始まり、今日の授業のめあてと流れを教師と児童生徒が共有できるようにしていました。

教科書があり、教科書の内容に沿って学習を進めていました。文法事項も小学校から扱っています。また、読み書きをするための学習も発達段階に応じて行われ、3年生であれば体を使ってというように、1時間の授業の中で楽しみながら大量の英語に触れていました。小学生でもすでに単語を書くことに慣れている様子で、提示されたいくつかの単語の中の1つを隠し、その単語を当てるゲーム（missing game）では、隠された単語をすらすらと書いていました。授業のテンポは速く、児童はあきることなく1時間の授業に参加していました。教師は、デジタル黒板、マイクを使用し、児童はデジタル端末も適宜使用していましたが、実際に書く活動は紙のワークシートやノートを使用していました。

子どもたちが意欲的に学ぶ姿勢に刺激を受け、それを支える教師側が、授業を通して学ぶことの素晴らしさを伝え、英語を通して子どもたちの視野を広げようとしていることに強く共感した視察でした。（小林伊津子 船橋市立習志野台第二小学校）



<台北市・小学校3年生の英語科の授業>

■ 台湾の指導者と指導スタイルから日本の小学校英語教育の現場へ

前年度と同じ小学校2校で、英語の授業を参観しました。前回同様に、指導者は流れるようなスピードで、テンポよく英語を教えていました。台北市の小学校の授業では、参観した学年が小学校3年生ということもあり、教員の発話において母語の使用場面が前回と比較して多いように見受けられました。また、前回の視察では全体での一斉指導が多く見られましたが、今回は、机間巡視を2、3回程度入れたり、個別指導が必要な児童の側に近寄ったり、長居をせず瞬時に母国語で教えていた点が見えたことに驚きました。この指導方法については、個別対応が必要な児童にとっては、大変有効な手段であると考えられ、日本でも実際に行われています。しかし日本と比べて、時間の費やし方に相違が見られました。日本では丁寧に教えることが良いこととされており、個別対応に時間がかかり過ぎる点があります。スピード感を重視する台湾の授業を振り返り、日本の個別対応への姿勢を修正する必要性を感じました。



<高雄市・4年生のグループ学習>

一方、高雄市の小学校教員は、去年の視察時と同様に、児童のグループワークを取り入れていました。児童がグループとなって活動する場面を増やしたことで、以前より児童の動きが活発化していました。今回の視察では、指導者の価値観や授業に対する姿勢について、細かい視点から観察することができたことが大きな成果であったと感じています。今後も日本の英語教育を更に高め続けていけるように発信していきたいと思っています。（高橋奈央子 千葉市立朝日ヶ丘小学校）

■ Be not afraid of going slowly, be afraid of standing still

台北市の立農國民小学校3年生の授業では、40分×週3コマが設定されていました。授業は /th/ の有声音・無声音の聞き分けをダンスで表現することから始まりました。前時の復習では、パラリンピック選手の写真を用い、He can run. She can swim. などの表現を引き出し、児童は驚きや感動を伴って発話していました。メインは現在進行形の導入で、ing形の作り方やformについて徹底した指導がなされていました。子ども達は飽きることなく、リズムや動作を組み合わせた豊富なインプットを楽しんでいました。



＜最小限の用語を用いて文法規則を教える＞

また、宿題や確認テストが定期的に行われ、学習方法の指導も丁寧に行っているのだそうです。「幼少期からテストをして、台湾の子ども達は英語が嫌いにならないのか」と質問すると、「みんな高得点だから私のテストが大好きなのよ！」と予想もしない答えが返ってきました。

私が驚いたことは、日本が大切にしている自分の考えや気持ちを表現する「言語活動」の場面がほとんどなかったことです。表現活動は重要ですが、その基盤となるformの指導や、楽しく力のつくトレーニングの在り方について、日本も学ぶべき点が多いと感じました。

視察前、台湾で特別な指導法が得られるのではと期待していました。しかし現地の先生方も人材不足や指導力向上といった同じ課題に向き合っていました。それでもなお情熱を持ち、日々実践を重ねる姿に心を打たれ、地道な積み重ねこそが教育を支えているのだと気付かされました。

ゆっくり進むことを恐れるな。立ち止まることを恐れよ。(中村恵美 開智学園)

4. 参加者の声（大学の先生方）

■ 台湾の英語授業に見る「2030年バイリンガル政策」最前線

昨年に続き、今年も高雄市内の小学校においてA先生による6年生の英語授業を参観しました。授業は（フルブライト英語教師フラッグシップによる）英語母語話者との2時間連続のティーム・ティーチング形式で実施されており、1時間目はA先生が主導しながら教科書やスライドを活用したミッシングゲームで語彙を復習し、その後、文型の練習や教科書の音読活動を行っていました。英語母語話者教員は、発音の模範やインタラクションのモデルを示す役割を担い、自然な形で授業に組み込まれていました。2時間目では、児童がユーチューバーになりきって自分



＜教科書、タブレット、そして手書きも大切＞

のチャンネル内容を英語で紹介するというパフォーマンス課題に向け、ワークシートに取り組みました。子どもたちは互いのアイデアを確認し合いながら活発に活動しており、後日送っていただいた発表動画では、生き生きと自分の考えを英語で表現する姿が印象的でした。

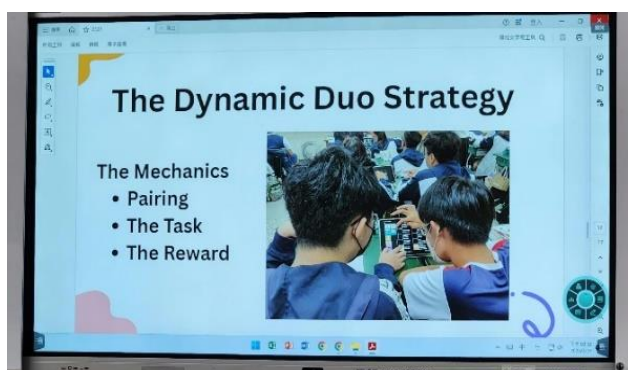
今回の授業を参観して改めて感じたのは、A先生がご自身の教育観に強い自信と信念を持ちながら授業づくりを行っているということです。昨年の授業後の授業検討会で伺ったことですが、A先生は固定的な指導観にとらわれず、自らの実践を

振り返りながら授業改善に取り組んでいました。また子どもの可能性を信じ、間違いを恐れず発話できる環境づくりを大切にしている姿勢も非常に印象的でした。子どもたちが安心して活動に参加し、自分の考えを積極的に表現していた背景には、このような教師の教育観が大きく影響しているようでした。一方で、このような環境を日本の学校現場で実現しようとした場合、授業時数や教員配置の制約が壁になることも少なくなく、改めてその難しさも考えさせられました。

さらに、英国留学経験や台湾政府が掲げる「2030年バイリンガル政策」（2030年までに英語を日常的に使える社会の実現を目指す国家戦略）への前向きな姿勢などからも、英語教育に対する強い思いや使命感が伝わってきました。

今回の授業参観を通して、授業技術だけでなく、教師自身の教育観や子どもへのまなざしが授業の雰囲気や子どもの姿に大きく表れることを改めて実感しました。A先生が実践していた「間違いを恐れず発話できる環境」は、私が提唱するポジティブ言語教育の核となる要素であり、その有効性を台湾の地で再確認することができました。

（大場浩正 上越教育大学）



<高雄市教育指導センターの説明資料>

■ 台湾の英語授業における ICT の活用について

私は昨年に引き続き本プログラムに参加させていただきましたが、今回はスケジュールの都合により部分的な参加となりました。2回目の訪問となった高雄市の小学校および高等学校では、昨年もお世話になった先生方と1年ぶりにお会いし、旧交を温めることができました。また今年初めて訪問した国立高雄師範大学や高雄市教育指導センターでは、先生方によるプレゼンテーションを通して台湾の教育について深く知ることができ、非常に学びの多い時間となりました。

小学校の英語授業では、昨年と同様に児童がタブレット（iPad）を使って学習を進める場面がありましたが、今年は個人練習としてではなく、グループでの協働作業を支援するツールとして活用されていた点が印象的でした。デジタル教科書やスライドを活用しながら、外国人英語教師（FET）とともに教師主導で授業を展開していく流れは今年も同じでしたが、プロジェクト型学習を取り入れることで児童の主体的な学びを促し、興味・関心を高めようと工夫している先生方の熱意を感じました。



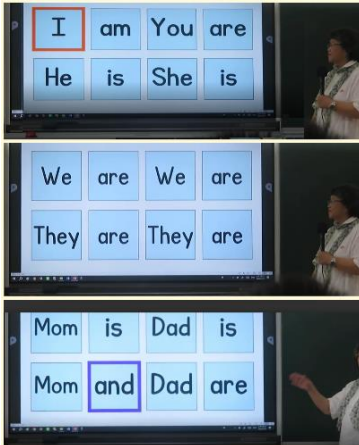
<グループでプロジェクトに取り組む児童たち>

今回の訪問を通して、台湾における ICT の活用や協働的な学びの実践について理解を深めることができました。また、昨年との比較を通して、各学校現場で教育の質向上に取り組んでいる様子を実感しました。本 SIG の視察で得た学びや気づきを生かし、今後の日本の英語教育のあり方について引き続き考えていきたいと思えます。

（桐生直幸 鎌倉女子大学短期大学部）

■ 文法規則を教えなくても、文法は指導できる！

昨年の「試行版研修」以来、考えているのは、台湾の高校生の英語コミュニケーション能力が高いのは、小学校で基礎がしっかり入っているからではないか、ということです。台北の小学校3年生の授業では、画面に I am, you are, he is, she is, we are, they are など、代名詞と be 動詞



の組合わせをリズムに乗せて次々に提示、児童は唱和します。主語と be 動詞を chunk として記憶させてしまうのです。また教員は、いろいろな人物の写真を次々に見せ What is he doing? や What are they doing? と発問し、児童は He is singing! They are dancing! と即答します。速いテンポは質問への反応速度を上げる効果があります。Harold E. Palmer の「マシガン Q&A」に通じるものだと思います。

日本でも昔、I, my, me. You, your, you. と唱えながら身体を動かす「人称体操」という実践がありました。今でもやっているかもしれませんが、今も 80 年代と同じ体操なら、代名詞の活用を覚えるだけなので、コミュニケーション力には直結しません。しかし、台湾の方法は、チャンクをすぐに学習や言語活動の場で活用させて効果を高めることができます。

日本の小学校では文法規則は扱いません。しかしこのような「チャンク・チャンツ」は、やはり小学校に向いています。文法チャンクを単なるドリルでなく、平素の授業や言語活動に生かす工夫と組み合わせるなら、一概に否定する必要はないように思えます。多くの研究者は、今の中学校英語の内容は、計 210 時間の小学校英語の上に乗せるには無理があると指摘します。小学校 4 年間で中学校までのなだらかな「助走路」として、言語の規則性に気付かせる指導を意図的に取り入れるなら、中・高の英語に必要な基礎を確保できるかもしれません。(小泉仁 星槎大学)

■ 発達段階に応じた双方向コミュニケーションと ITC 活用の巧みさに感銘

私は昨年続き、今年も 2 泊 3 日で部分的に視察に参加しました。視察した授業は、3 日目の高雄市立内惟国民小學の授業（チーム・ティーチングで 2 時間）と国立高雄師範大學附属中學の授業（1 時間）です。授業後は、国立高雄師範大學英語教室の先生方とのミーティングに参加しました。もちろん全行程に参加できるに越したことはないのですが、短時間の参加でも多くの学びがあることを今回も実感しました。まさに百聞は一見にしかず、台湾の授業づくりに触れることのできる貴重な機会でした。

特に、先生方の力量の高さや誠実な人柄、ほぼオールイングリッシュの指導での発達段階に応じた児童生徒の参加のさせ方に感銘を受けました。帰国後に、小学校教員志望の学生に動画を見せると、学習導入期のチーム・ティーチングのメリット（授業のリードと取り残しを防ぐサポートが同時進行できる、など）の気づきもありました。視察中に知れたクラスサイズや現職教員研修のサイズの違いも考え、今後は日台の教育環境の物理的な違いについてもデータ分析してみようと思っています。

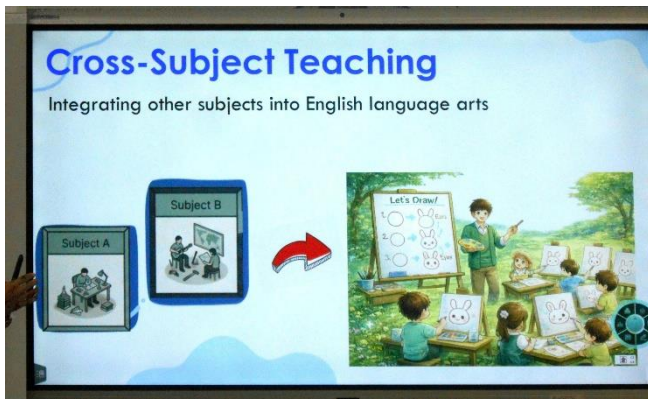
今回も全国規模で集った多様なバックグラウンドの先生方と交流できたことは大変有意義で且つとても楽しい経験でした。皆様ありがとうございます。本 SIG が更に発展していきますように！（戸谷敦子 広島都市学園大学）



＜高雄市立内惟小学校の外国人英語教員＞

■ 台湾の小学校に CLIL を導入するための教育環境の整備

2 回目の台湾視察では、新たに教員養成大学や行政機関を訪問する機会があり、私の専門とする CLIL の視点でいくつかの発見がありました。現在、台湾では言語教育政策として、2030 年に向けて CLIL を中心とするバイリンガル教育の実現を目指しています。日本の現行の小学校学習



<高雄市教員研修センター：説明資料>

指導要領（外国語）においても他教科を活用して英語教育を行うべきと強調されていますが、そのための方策が十分に取られているとは言えません。それに対し台湾では、大学や行政により、CLIL を小学校現場に効果的に導入していくための様々な手段が実際に取られています。

第一に、国立高雄師範大学英語教室への訪問からは、同大学のバイリンガル研修センターを中心に CLIL の教員養成が行われていることが分かりました。専門のトレー

ナーが、英語と他教科（理科や社会など）の複数の教員免許を取得する学生に対して内容と言語をうまく統合して教える方法を指導しているのです。第2に、高雄市教育指導センターへの訪問からは、小学校担当者らのプレゼンにより芸術や体育等の実技科目で CLIL を行う小学校が増えていることが示されました。また、個別の CLIL 授業をより充実させるために、現職教員やバイリンガル教員を目指す学生に対して教員研修の各種プログラム（TETE や CLIL、バイリンガル実験クラスなど）が提供され、各々に予算も計上されていることが分かりました。

以上の訪問により、日本の小学校で CLIL をもっと普及させたいならば、まずは教員研修や教育予算などの教育環境の整備が必要ではないかと強く感じました。（二五義博 山口学芸大学）

■ 台湾英語教育視察プログラムからの示唆

初めての授業視察として、公立小学校2校および高校2校（中程度校・進学校）を訪問し、授業見学を行いました。併せて大学および教育委員会の教育指導センターを訪問し、教員養成課程のカリキュラムや小学校英語教育の取り組み、ICT教材の活用について知見を得ました。

小学校では教員主導の授業が展開され、ICT教材の効果的な活用と教員の高い英語運用能力により、良質なインプットが確保されていました。また、児童の発話練習を繰り返しつつ、教師が英語でテンポよくやり取りを行う効率的な授業展開が見られました。一方で、授業進行の速さから、児童が思考を深める時間が限られていることや、授業についていけない児童の様子も観察されました。授業後の懇談で確認したところ、こうした児童への対応は主として担当教員に委ねられ、可能な範囲の補足指導が行われており、日本と共通する課題も確認できました。

台湾の英語教育はバイリンガル政策を背景とし、教員養成や研修体制、財政面において日本と大きく異なりますが、ICTを活用しつつインプットとアウトプットを体系的に積み上げる実践から

得られる示唆は多いと考えます。さらに、台湾の小学校英語教育の先の姿となる、高校生との交流は相互理解を深める機会となり、生徒の実用的な英語運用能力の高さが印象的でした。本視察は「使える英語」を育成する指導の在り方について再考する契機となり、日本の教育観に即した発展的实践を模索する上で有意義な機会となりました。（松延亜紀 関西学院大学）



<高雄市教員研修センター：指導主事から研修体制の説明>